

1 生活科における「問いをもち、主体的に追求する姿」

- 願いをもって自ら対象に関わる姿
- 対象に対してのこだわりをもって没頭する姿
- 対象に対する気付きを広げ深めながら新たな問いをもつ姿

低学年の子どもたちは、どんな学習や活動にも意欲的に取り組む。できるかどうかわからないという不安がないわけではないが、何でも「やってみたい」と思う存在である。そんな子どもたちが、「問いをもち追求する姿」として上の三つを挙げた。生活科では、「問いをもちこと」を「対象に対して自分との関わりの中で問題意識をもつこと」と定義している。例えば、「これは何かな？」ではなく、「これをどう使ったら、もっと～できるかな。」と自分の願いに引き寄せて問題意識をもつことである（図1）。

一つ目の「願いをもって」とは、「～したい」という子どもの思いに「もっと高くとばしたい！」「〇〇さんみたいに…できたらいいな」「～できるようにするには、どうしたらいいかな！」という追求していく方向が見えている状態をいう。追求する方向が子ども自身に見えるようになっていることは、追求がより連続し、子どもたちが安心して追求できる支えとなると考える。このような願いをもって「ひと・もの・こと」に主体的に関わろうとする姿を生活科の学びの中で目指したい。

二つ目にある「こだわり」とは、願いをもった子どもたちが、その対象について「やってみたい！」「調べてみたい！」と主体的に関わることをいう。小学校1・2年生の子どもたちには「見えているものが見えていない」状態がある。それは、例えば、通学路沿いに昔からある商店について、普段は何気なく通っているだけで中に誰がいて何をしているかについて全く知らないような子どもの状態をいう。そんな子どもが、そこで働く「ひと」に愛着をもって関わろうとしたり見付けたことを伝えようとしたりすることをこだわりをもってしている状態という。そのような姿を引き出すためには、「どんなものを売っているのか」「どうして朝早く起きるのか？」など、その子なりのそのお店に対するこだわりのある追求が必要である。そのような「こだわり」と「没頭」のある追求を支えていくことができるようにしたい。

三つ目の「対象に対する気付きを広げ深めながら」とは、子どもが自らの追求を「お隣さん」、「ペアの子」、「グループ」、「学級のみんな」といった他者との関わりの中で伝え合ったり、又は、自分自身に語りかけたりするふりかえりを行う中で目指す姿である。一人でこだわりをもってとことん追求することも必要であるが、自分以外の他者と関わる中で、「ぼくと違う」「どうしてそうなるのかな」「もっと〇〇さんみたいに□□したい」といった気付きや願いをもつことも必要である。その気付きや願いが、伝え合うことによって自分の中に「新たな問い」を生み出し、それが次の活動へつながっていくことで学びが繋がると考える。

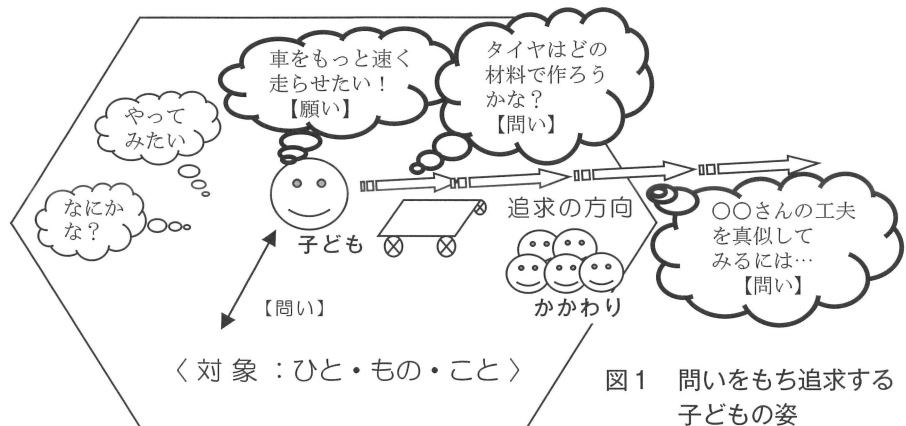


図1 問いをもち追求する子どもの姿

そして、このような学習を展開することで、その対象についての気付きの質が高まるであろう。さらに、気付きの質が高まるような学びの繰り返しにより、子どもたちのくらしが豊かになっていくと考える。

2 「問いをもち、主体的に追求する姿」を求めて

上記のような姿を生み出すためには、右の4点について教師が工夫していくことが必要と考える。

- | |
|-------------------------------|
| ① 願いをかなえようとする問いが生まれる対象との出会わせ方 |
| ② 問いを追求できる学び方の獲得 |
| ③ 一人一人の追求を支える対話 |
| ④ 学び合いの設定 |

① 願いをかなえようとする問いが生まれる対象との出会わせ方

子どもが学習対象に対して自ら願いをもつような、またその願いをかなえたいくなるような問いが生まれる対象を選ぶこと、また、選んだ対象とどう出会わせるかを教師は考えなければならない。対象と出会ったとき、どんな気付きの芽生えをもつかがその後の追求が連続するような問いをもつことに大きく関わってくる。そこで、子どもたちが日々のくらしの中で何に目を向け、どんなことに心を動かしているのか、くらしや生活経験、思いなどを探るため、子どもと深く関わり、子どものくらしを掘り起こすことを大事にしていく。

② 問いを追求できる学び方の獲得

また、小学校の1・2年生が学習対象に対して、自ら問いをもち、こだわりをもって追求していくことは簡単なことではない。そういった学び方についても、生活科の学習の一つ一つを通して獲得していくことができると考え、停滞したり逆戻りしたりする子どもなりの追求の仕方を見守り、認めながら、教師は子どもが願いをかなえることができる追求となるように手助けを行う。そういった積み重ねが今後のあらゆる学習場面での支えとなると考えている。

③ 一人一人の追求を支える対話

そして、子どもの「問いをもち主体的に追求する姿」を支えていくためには、「対話」を大事にしていきたいと考える。ここでいう“対話”とは、子どもと教師の会話やふりかえりカード、毎日やりとりする日記などを通した子どもとの筆談や会話と定義している。子どもが、どんな願いをもっているのか、そうした願いをかなえるための追求にするためには、どんな支えが必要か（のぞんでいるのか）などを考える材料として、日々の子どものとらえを大切にしていく。

④ 学び合いの設定

このときにとらえた子どもの気付きや問いを、学級全体で共有化したり明確化したりする学び合いを単元の中に設定する。学び合いは、「ふりかえり」「めあてづくり」「気付きの広がりや深まり」とそのねらいを明確にして設定し、単元を通して気付きの質が高まっていくようにコーディネートする。まず、気付きの芽生えや初めの問いをとらえ、学級全体で共有化したり明確化したりすることで単元を貫くめあて（追求の方向が見えるための問い）を子どもと一緒につくっていく「めあてづくり」を行う。次に、「伝えたい」「他の友だちがどんなことをしているか知りたい」という願いの高まりに合わせて設定する「気付きの広がりや深まり」をねらう学び合いを行う。そして、1時間毎や単元終末に、自分の学びを子ども自らが自覚し、さらなる願いや新たな問いをもつことをねらう「ふりかえり」の学び合いを行う。

学び合いの際の表現方法は、実際にその場でやって見せたり、実物をもって説明したりするなど、子どもの願いに寄り添って行うようにする。子どものこだわりをもった追求や気付きが、広がり深まるような学び合いを有効に機能させることで、問いが連続し、子どもたちのくらしを豊かにしていく力が養われるようにしたい。

(文責 大坂 慎也)